氏　　名　成田博保（なりたひろやす）

学位の種類　医学博士

学位記番号　論医博第794号

学位授与の日付　昭和54年5月23日

学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当

学位論文題目　小児各種疾患の病期別にみたリンパ球 Subpopulation

論文調査委員　（主査）教授 太藤重夫　教授 濱島義博　教授 奥田六郎

論文内容の要旨

小児において一般によくみられる各種疾患につき，病期別にリンパ球 Subpopulation の測定を行った。また健康児のリンパ球 Subpopulation を対照にして，患児の値とを比較検討した。TおよびB細胞の測定は，マイクロプレート法を用いて，Eおよび EAC ロゼット法によった。

1) 健康人のT・B細胞百分率は，新生児期より成人までの間で大きな変化はみられず，T・B細胞絶対数は，小児期で高値を示した。

2) 麻疹では，T細胞百分率が発症後4週目迄で有意に低下していた。

風疹では，T細胞百分率・絶対数が発症後1週以内で有意に低下していた。

手足口病では，発症後1週以内でT細胞百分率が有意に低下，B細胞百分率・絶対数が有意に上昇していた。

細菌感染症では，急性発熱期および解熱後2週以内の回復期において，T細胞百分率が有意に低下，B細胞百分率・絶対数が有意に上昇していた。

以上，上にあげた感染症では，ウィルス性・細菌性をとわず一般に急性期にT細胞の低下・B細胞の上昇がみられ，回復期には急性期に比べT細胞の上昇・B細胞の低下の傾向がみられた。

3) 気管支喘息では，中等症・重症および血清 IgE 値の高い群で，有意のT細胞百分率の低下・B細胞百分率の上昇がみられた。また血清 IgE 値とT細胞百分率との間に負の相関がみられた。

4) ネフローゼでは，増悪期・寛解期においてT細胞百分率が有意に低下しており，増悪期においてB細胞百分率が有意に上昇していた。しかしながら，ステロイド剤や免疫抑制剤がほとんど使用されていない時期では，T細胞・B細胞の有意の変化がみられなかった。それ故，本症にみられるT・B細胞百分率の変化は，これらの薬剤の影響を無視しえないと思われた。

5) 上にあげた疾患における，T細胞・B細胞の変化の臨床的意義につき考察を加えた。

論文審査の結果の要旨

本論文は，小児各種疾患で病期別にリンパ球 subpopulation がいかに変動するかをみたものである。リンパ球測定はマイクロプレート使用，Eと EAC ロゼット法によった。対照として新生児から成人までの年齢別のT・B細胞百分率並びに絶対数を調べ各疾患患児のものと比較した。研究成績：(1)感染症はウイルス性や細菌性を問わず，一般に急性期にT細胞の百分率の低下，B細胞百分率の上昇がみられ，回復期には急性期に比しT細胞の百分率上昇，B細胞の百分率低下傾向が認められた。(2)気管支喘息では，中・重症及び血清 IgE 値の高い群で有意のT細胞百分率の低下，B細胞百分率の上昇がみられ，また血清 IgE 値とT細胞百分率の間に負の相関がみられた。(3)ネフローゼでは増悪期，寛解期にT細胞百分率の有意低下等をみたが，これらの変化は投与薬剤の影響によることを明らかにした。

以上の研究は，小児諸疾患時のリンパ球 subpopulation の病期による変動を明らかにしたもので，小児各種疾患時の生体反応の解明に寄与するところが大きい。

よって，本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。